草画帖



第十二帖音樂号



三味線草 / 表紙 露草筆

骨太のベース歩みし かりの銀河場末のジャズ喫茶

紫	耽	骨
陽	美	太
花	派	の
の	Ø	ベ
七 变	ピ	1
化	ア	ス
す)	步
る	滴	み
۴	る	し
ラ	Fi.	梅
7		雨
ソ	月	の
D	闇	底



チャーリー・パーカーの命日に雉に逢う。 昔犀川で拾った雉の羽根で。Ornithology



辛夷の花を訪ねたら、アオジが流麗に歌った。 形見の小枝で、コブシとアオジに捧げて。





茗荷 (ミョウガ) 筆。 どこにいても、音楽は鳴り出す。こころは歌い出す。



羅漢槙の葉。 墨は乗りにくかったが、気韻生動、リズムには乗った。

遠くで 絮をふいて 夜の書斎に 一発 底ぬけ 心は 男の ピアノ メランコリックな雷鳴 雨音を縫う

歌(彗星)

どこかへ

遠吠えしたい

そんな時があるだろう

静かではない

いのちは

天然を許される

宙では

彗星の歌を探査機が聴いた



野茨筆。 ふうらもまた音楽する惑星の住人であり、旅人である。



百合筆。 百合の花の喇叭を吹くふうら。



金水引筆。 胡弓の音色は、風の呼吸。風の哀愁。



金水引筆。 吟遊詩人は幼い頃からの憧れ。



2018年3月15日。椿筆。

「レスターは自然だ」と、あるジャズ喫茶のマスターに教わった。

草話

ナショナルに繋がる、と勇気を与えてくれたのは、サニー・アデのジ とか言葉を綴らせてくれたのは、マル・ウォルドロンのソロ・ピアノ。 ふうらを描き始めた頃、それでいい、 音楽には何度も救われた。 学生時代、 そのまま進むことがインター 言語不信が叫ばれる中で、何

ユジュ・ミュージック。 穏やかな気候だけが取り柄の、古本屋もジャズ喫茶もない田舎に住

んでいるが、それ以前の三十年を縁もゆかりもなかった雪国で暮らし

げたりもする。それが様になって、男女問わずファンも多かった。 たのは、いいジャズ喫茶があって、いいマスターがいたから。 がひとりコーヒーを淹れている。演奏のサビにくると、時折、 がらんと広い空間にのびやかに音が走って、飄然としたのっぽの人 声を上

い込んでいたのが、癌で亡くなった。その年の暮に、いろいろあって って、いっしょに俳句をやった。こんな自然体の人は長く生きると思 ジャズのいろんな良さを教えてもらい、後には蕪村病を移してしま

雪国暮らしを精算した。

六月十七日になると、マスターの愛聴した盤を聴く。 61 まも銀

ヒーを啜りながらジャズを聴いている風景はいいと思う。 のどこかでジャズ喫茶を開いていてほしい。音楽好きな宇宙人がコー



俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第12号 2019年6月17日 泉井小太郎編集 六角文庫発行 〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008